

目黒稲門会 EXPRESS

★★★★★2004年3月発行／第15号★★★★★

発行人：眞仁田勉 編集長：藤岡長世 事務局：〒152-0002目黒区目黒本町6-21-14 TEL:03-5723-8156



2004年 新年会、開催される

1月11日、目黒雅叙園で目黒稲門会の新年会が開催されました。今回はイタリアルネサンスに造詣の深い青木昭氏を講師に迎え、ルネサンス美術の話を伺いました。壁画修復のビフォー＝(くすんだ色)とアフター＝(制作当時の鮮やかな色)がプロジェクター大画面で対比されると、会場参加者はその色の違いにびっくり。また青木氏の理知的でわかりやすい解説により、ミケランジェロの絵の持つ深い意味がわかりました。

懇親会では恒例のカラオケで盛り上がりました。カラオケ部会：大野さんの司会により、懐かしい歌や新しい歌が響き渡り、改めて目黒稲門会会員のレベルの高さ&声の大きさを実感しました。

とくに今年は新入会員の参加が多く、賑やかな会となりました。ご参加ご関係の方々、有難うございました。(岩崎 記)

<出席者>

浅海 敏之	阿部喜久雄	阿部令夫人	荒瀬修一郎
市瀬 一江	市瀬 達夫	伊藤 徳男	伊藤 悠
井村 正陽	岩崎 正夫	海口 昭治	榎本 茂
大杉 邦雄	大野 幸子	大野 利幸	岡田 鐘吾
小川 裕正	小川令夫人	海沼美智子	加藤 栄護
加藤 玲子	川辺 忠俊	岸 猛弘	木村令夫人
木村 昭一	桑野 祐光	桑野令夫人	郡山 弘文
桜井 輝隆	島田 久家	鈴木 正明	田島順一郎
土川 俊雄	手塚 仁雄	外岡 明	外岡令夫人
内藤 様	中上美代子	中沢 信平	中西千可子
林田令夫人	林田 雅敏	樋口 定広	土方 正巳
藤岡 長世	伏見 和則	堀井 良造	眞仁田 勉
眞仁田令夫人	水野 弘文	村上 満	
森家 一三	保井 正	梁瀬陽太郎	
梁瀬 康子	山口 一男	山科 久夫	
八幡和二郎	八幡令夫人	横山 大	
吉沢 勲夫	吉田 博行	吉田令夫人	
渡邊令夫人	渡邊 三郎		
関 和平	田 哲基		



講演後談笑する
青木氏と眞仁田会長

春の懇親・箱根一泊、ご参加募集中!

いよいよ3月、春になりました。そこで目黒区の箱根保養所でゆったりしませんか?趣味部会の仲間(囲碁・麻雀・カラオケなどの準備OK)で楽しんだり、ぶらぶら箱根の山道を散策したり…。(最近利用した会員によると、食事もおいしいですよです。)先着順です。お早めに!

- * 日時:平成16年4月19日(月)～20日(火) 1泊2食
- * 場所:目黒区箱根保養所(強羅)
- * 参加費:9,000円(宿泊代+夕食時飲み物&追加料理代)
- * 定員:29名(定員になり次第締切)
- * 申込み:FAXまたはTELで03-3714-6299井村まで(旅行部会長代行)
- * 申込締切:4月4日(日) お申込みの方は4月9日(金)までに東京三菱銀行中目黒支店(普)0363450 目黒稲門会代表浅海敏之までお振込みください。

東京23区支部大会 開催

2月18日、リーガロイヤルホテル東京において、東京23区支部大会が開催されました。昨年4月設立以来初の支部大会。東京23全区から250名を超える各区稲門会員が参加し盛大に行われました。

第1部では清水英男幹事(荒川稲門会)司会のもと、白井克彦総長「早稲田大学・この意欲的改革」、植草一秀大学院教授「どうする・この日本経済」の講演が行なわれました。

第2部は鈴木宏治幹事(世田谷稲門会)司会のもと、創立125周年記念募金(50万円)を東京23区支部から白井総長に贈呈しました。来賓紹介のあと、小林榮一郎校友会代表幹事による乾杯の音頭で開宴した。

懇親の間、ナレオシックスアイランズ(早稲田大学OB・1997年結成)が楽しいハワイアン演奏を繰り広げました。後半、石川範行会員(豊島稲門会)の指揮のもと校歌斉唱とエール、そして口元周策校友会事務局長の支部へのエールが…。最後に手塚善雄副支部長(千代田稲門会)の中締めで散会しました。

東京23区支部は昨年4月に設立。東京の23区各稲門会のまとめ役として活動しています。今年度はすでに昨年6月の支部総会、10月の稲門祭・準備と実施と、活動を重ねてきました。今後、大学のお膝元の支部として大学の意欲的な改革を支える新たな力として期待されています。(なお今年度は、目黒稲門会が支部長を担当しました。)

<来賓> (敬称略)

白井 克彦(早稲田大学総長)	岡本 宏一(校友課長)
植草 一秀(早稲田大学大学院教授)	斎藤 鉄生(総長室調査役)
小林榮一郎(早稲田大学校友会代表幹事)	宮沢 晃平(三多摩支部副支部長)
井原 徹(早稲田大学理事)	佐藤 靖雄(神奈川県支部幹事長)
口元 周策(校友会事務局長・125周年募金部長)	富所 正勝(千葉県支部副幹事長)
後藤由美子(総長室副室長・募金課長)	
井上 文人(総長室秘書課長)	
桜井 直子(総長室調査役)	
石森 裕(校友課)	
福井 衛(三多摩支部事務局長)	
塚田 巖(神奈川県支部事務局長)	

<目黒稲門会・出席者>

海沼美智子	水野 弘文	保井 正	大竹 一子
岩崎 正夫	浅海 敏之	大野 利幸	小川 裕正
岸 猛弘	島田 久家	鈴木 正明	外岡 明
中上美代子	樋口 定広	八幡和二郎	吉沢 勲夫
渡邊 三郎	星野 聡史	阿部喜久雄	熊谷 倫子
伊藤 源喜	森家 一三		



東京23区支部より募金贈呈

会員の消息

<入会>

小島健一:昭和51年・法(目黒区・碑文谷)バレーボール、音楽鑑賞
大杉邦雄:昭和40年・法(目黒区・中目黒)ゴルフ、麻雀、カラオケ、書道
武田 明:昭和56年・教育(目黒区・八雲)ゴルフ、テニス、スキー

<訃報>

顧問:大隈信行さん93才(早稲田大学創立者・大隈重信のお孫さん)が2月28日、肺炎のため亡くなりました。参議院議員を1期務められたほか、ガーナ大使などを歴任されました。ご冥福をお祈りいたします。

関 和平:昭和34年・法(世田谷区・宮坂)ゴルフ、水泳
安部幾雄:昭和35年・法(目黒区・上目黒)ゴルフ、旅行
高木亮一:昭和44年・理工(目黒区・五本木)ジャズ鑑賞

【 空 往 満 帰 】

— 外岡茂十郎の軌跡 —

目黒稲門会 外岡 明(26年理工・電)

はじめに:—

’03年7月の目黒稲門会「役員会」終了後の雑談時に、突然、真仁田会長(28年・法)が、独り言の様に切り出された。

「我々の学生時代は、早稲田野球の黄金期で、飛田さん(忠順「穂洲」)、外岡さん(茂十郎)、森さん(茂雄)の三人が主軸でしたね。私ども年配者には、思い出多い懐かしい時代です。なかでも外岡さんは、戦前戦後を通じて30年近くも野球部長の任に就いておられたのですが…。外岡先生が野球部に関わられるようになったのは、どんな経緯であったのか、又どうして学生野球にそんなに打ち込まれたのか、その辺のところは大変興味深いものがあります。

どうですか外岡(私)さん。お父(養父)さんの その辺のところを会報に投稿して頂けませんか。会員方に貴重な記事になると思うのですが…。」と言ってこちらに顔をむけられた。この不意の問い掛けに、私はハッと戸惑った。が、この一瞬の逡巡が命取りになってしまった。「その辺の事情をご存知の方がおられれば、私の方が伺いたいぐらいです。」とは申し上げたものの、時すでに遅し、周りの人々に拍手で賛同されてしまった。「野球部に詳しい人なら、この会の中にも 松岡さんとか八幡さんとか難波さんなどがいらっしゃいますよ。」という私の逃げ口上も、虚しいものであった。

…という訳で、下調べのため 数ヶ月の猶予を頂いたものの、結局お引き受けすることとなった。

そこで8月の酷暑の中、孫をアルバイトに雇って屋根裏部屋を整理し、その一番奥に保存してあった父の諸資料を引っ張り出し、一から読み始め、読み漁り、何とか その人間像を皆様に取り次げる様努力すべく、作業を始めた。

父には、「家庭での夫・父としての顔」、「民法学者としての顔」、そして「学生野球を愛した教育者としての顔」があります。

本文は、その中の学生野球をこよなく愛した「教育者としての顔」に焦点を当てて、出来るだけ客観的に取り纏めたいと考えました。

しかし、何分にも非才の身のやること、お読み応えの無さは、何卒ご容赦下さい。

[註]

・飛田さん(明治19年~昭和40年、大正12年 法 野球部 初代監督、

野球部の重鎮、育ての親。昭和35年野球殿堂 入り)

・森さん(明治39~昭和52年、昭和6年 商、

昭和5年 野球部主将 昭和11年 大阪タイガース初代監督

昭和22~ 早大野球部 監督10年間で優勝9回 大洋球団社長

昭和52年 野球殿堂入り)

・松岡さん(雅俊:昭和31年 商 野球部 昭和30年秋早明戦で逆転サヨナラホームラン 東映フライヤーズ 目黒稲門会幹事)

・八幡さん(和三郎:昭和33年 商 目黒稲門会幹事、父恭助氏

大正3年 卒、明治44年 早大野球部

第二回アメリカ遠征のメンバー、兄良二氏 昭和29年 教 野球部)

・難波さん(秀哉:昭和53年 社会 野球部 目黒稲門会)

《内容》

プロローグ

- ①講義の姿勢 ②講義と野球 ③野球と人生
- ④生い立ち ⑤学生野球との出会い ⑥戦時下の学生野球
- ⑦東京大学野球連盟 解散 ⑧出陣学徒に贈る早慶戦
- ⑨終 戦 ⑩野球復活第一陣 オール早慶戦
- ⑪リーグ戦 復活 ⑫戦後 早稲田野球の黄金時代
- ⑬部長・監督退陣要求 ⑭新監督でのリーグ戦
- ⑮野球部 歴代部長・監督 ⑯学生野球に学ぶ(1・5)
- ⑰歩んできた道(1・3) ⑱結 び

プロローグ

「……『甲男と乙女が婚姻と類似の関係、つまり内縁関係を結んだ。そして必然の結果として乙女のお腹が大きくなった。』と云うような話をしていたかと思いますが、突如として『ライトが絶好の好返球! ワンバウンド! 本塁タッチアウト!! 見事でしたね…』と。こう言う話が講義の中で突如出て参りまして、これが法律の話と渾然一体となっておりまして、何処からが法律の話で、何処からが野球の話なのか判らない様な誠に軽妙洒落な講義を承りました。

これは外岡先生が別に脱線している訳ではなくて、先生自身が、実は野球の選手諸君から色々なことを学んでおられる処を、また学生諸君に話してこれを伝える。…… 恐らく先生はそういうことを意識しておられなかったと思いますが、おのずとそこに先生の指導方針が表れ…、先生が如何に学問と学生と、そして学生野球を愛しておられたか、と云うことを本当に痛感致しました。それだからこそ、早稲田の野球部をこよなく愛し、守り育て、そして戦後の黄金時代を築き、更に、戦後の学生野球の向上に尽くされたのではないだろうか、このように考えております。…」

これは、昭和57年9月、野球殿堂入りに際し、稲門倶楽部主催の祝賀会が 大隈会館で催された時の、西原春夫常任理事(同年11月に総長、昭和26年・法)の祝辞の一端であります。このお言葉は父の講義の姿勢を、真に良く表しておられるのでないかと思います。

私は理工学部なので、一度も父の講義を聞いた事は無いのですが、時折 家で授業の模様などを話す折、そこには難解な法律、緻密な法理論を如何に学生に関心を持たせ、自分で考える糸口を見つけさせるかに、心を砕いている様でした。

① 講義の姿勢

その点につきある学会で、次の様に話しております。

「私の親族法の講義は、学生が身近に感じ、自分で考えてみようといった問題から始めるのです。

例えば、学生に向かって『君の名は誰が付けたのですか』と聞いてみる。大抵は『お父さんがつけた』と言うでしょう。そこで、『子に命名することは親権者としての監督義務だとしたら、今は父母が共同して親権を行うのだから、若しお父さんは太郎と、そしてお母さんは次郎

と名を付けたいと言いつた場合、多数決で決める訳にもいかないじゃないですか。』と言う様なことから話を持ていきますと、案外興味深げな顔で聞いてくれるような感じがするのです。また、教室でこんなやり取りもありました。『あなた方は、親に対して、大学へ進学させることを求めることができますか。親は子供に、小学校から中学校までの九年の普通教育を受けさせる義務を負ってはいますが、高等学校や大学に進学させる義務はないから、それは親の恩恵であって、義務ではない、のではないですか』。そこで、公法である教育基本法の規定する義務教育と、私法である民法の規定する親が子を教育する義務とを、どのように理解すべきか、というような問題になると、学生もいまさらの様に、真剣に聞き入るのであります』と。

又、日常の講義では、大教室でもマイクを使わず、壇上から降りて学生の間に歩いて行き、学生と対話する様に話す。これは学生に親近感を与えるらしい。

戦前の或る学生(後に教授)が、授業の様を こう回想しています。

「家を同じうする夫の庶子と妻の私生子とは、他人ですか、兄弟ですか」という声が聞こえたかと思うと、先生の人差し指がギューと胸元にのびて来た。……何が何だかわからなかったが、反射的に私は「兄弟です」と答えたら、先生はニコニコ笑いながら、「どうですか」と他の友人を指した。友人は、これまた反射的に「他人です」と答えた。

先生は、「同じ問題で、兄弟と他人という全く反対の答えが出ましたが、みんなはどう思いますか……どちらの答えが正しいのか、それとも、どちらも正しいのか、どちらも間違っているのか……いかがですか。」と、問いながら、学生に考える端緒をつくり、学生は誘導尋問に引っかかったり、助け舟を出されたりしながら、継親子・嫡母庶子関係の問題に導き入れられてゆくという具合です」。

このように外岡の講義は、ユーモアを混えつつ実例を駆使しながら、法理論の運びを、要領よく 学生に理解されるように導いていくという手法の様でした。



外岡氏29才の講義(昭和2年11月)

②講義と野球

このような講義の進め方も、野球部長となってからは、少し変ってきた様です。

野球選手の 礼儀、規律、鍛錬など、日常生活に直接触れて 得たことと、法律とを結びつけた手法が採られる様になって来たのです。「スポーツはスポーツとして特別な意味もあることですが、それ

が学生のスポーツだと言うことになれば、やはりそのスポーツを通じて人間が鍛錬されてゆく、と云う教育の一面を担当する 特別の意味があるんじゃないでしょうかねえ。」と、ある対談で語っている。

或る教授は言う。

「実際、学生野球に対する外岡教授の打ち込み方には驚くべきものがあり、日常の対話やスピーチにおいて、

野球以外のことにまで 何かと学生野球が引き合いに出され、およそ、学生野球と結びつきそうにない法律問題の説明にさえ、しばしば、これが見事に結びつけられて、対照の役割を果たしている。 さような身の入れ方は、恐らく、教授の法学研究を通して磨き上げた公正の精神が、スポーツにおけるフェア・プレーのスピリットに通ずるところがある上に、学生野球の明朗性と清浄性が、陰をもたない性格の教授を魅き込んだものであろう。教授がその快心の野球随筆「フェア・プレー」の中で、『野球を通して日常の生活を反省する、また楽しからずや。』とまで述べられていることは、学生野球への身の入れ方のほどを、如実に物語るものといえる」。

③ 野球と人生

また、元総長の大浜信泉先生は、昭和35年『現代法学の諸問題』(外岡の還暦祝賀論文集)の序文に、こう書いておられます。

「外岡教授の教育者としての経歴と業績を語るにあたって、野球部長としてのそれにふれないとなると、大きな片手落ちの誹りをまぬかれないであろう。ことほどさように、学生野球に対する関心と活動が、教授の人生の上に大きな比重を占めているのである。野球部の運営に対する常時の監督指導はむろんのこと、地方遠征、合宿訓練に際しても、教授は万難を排してこれに参加し、選手諸君と寝食を共にしてその指導にあたられるほどの熱のいれかたである。野球を除くと、教授の生活に大きなブランクができてしまうのではないと思われるほどであるが、また 教授のこのような熱心な指導と監督があったればこそ、安部磯雄先生によって打建てられた 早稲田大学野球部の輝かしい伝統も、これを保持することができている、といっても過言ではないであろう。……」。

外岡自身はこう述べている。

「私はスポーツを通して人生を感じ、社会を考え、法律を論ずることに、限らない興味をもっている。しかし、そのようなことは、スポーツがスポーツとしてそれ自身、価値と意味をもつものである以上、本来の意味におけるスポーツの醍醐味ではないかも知れない。 考えようによっては、スポーツの邪道であると言え云えるかもしれない。 それにもかかわらず 私は十年一日の如く、スポーツを通して哲学を持とう としている。 そこに社会を知り、人生を見出そうとしている。…スポーツ絵巻に展開される清々しさは、私たちの明日の生活の上に、大きな示唆を与えずにはおかぬからである。 野球を通して日常の生活を反省する、亦 楽しからずやである」。

④ 生い立ち

外岡は、明治31年(1898)伊豆下田から南西20kmほど離れた静岡県賀茂郡三坂村入間(現 南伊豆町)で呱呱の声をあげた。

そして賀茂郡立豆陽中学校(現 県立下田北高)に学び、大正5年早稲田大学専門部法律科に進学した。

当時 東京への往復は、200トン級の船便か、天城越えの馬車によるしかなかった。

船便の場合は、朝10時 下田を出港して、翌朝4時に東京の豊洲島に到着した。また 天城越えの場合は、「伊豆の踊子」の歩んだ道を馬車で大仁まで行き、そこに一泊して翌朝 駿豆鉄道で三島に出て、東海道線に乗り換えて、夕方 東京に着いた。

早稲田で学ぶに当っては、法律科を選び 民法、特に親族法の研究を志した。

中学卒業時には特段の成績ではなかったので、早稲田に入学してから 相当努力をしたのであろう、専門部二年、三年の2年間は特待生となり、学費は免除されている。 大正8年 卒業後、更に 研究科に進み、遊佐慶夫教授の指導を受け、大正10年には、付属高等学院・高等予科の講師に任じられた。そして、大正11年から2年間、早稲田大学 海外留学生としてロンドン大学に留学、帰朝すると直ぐ法学部 助教授となった。そして翌 大正14年4月には、27才の若さで教授に嘱任された。(当時の早稲田大学法学部は、大正9年の大学令に準拠して陣容整備の最中であつたせいであろうか。)

⑤ 学生野球との出会い

もともと子供の頃から野球は好きであつた。 中学時代は下田のお寺の境内などで草野球を楽しんでいたが 早稲田へ入ってからは、早明戦などを 好んで見物に行っていた様だ。(明治36年に始まった早慶戦は応援の過熱激化のため、明治39年から大正13年まで中断していた)また、昭和の初め、法学部教職員チームの三塁手として校内野球なども楽しんでいた。

しかし、決定的に学生野球界に足を突っ込む切掛けとなつたのは、全く予期せぬ事情からであつた。

昭和10年秋、早稲田はリーグ戦(10戦7勝2敗1分)で優勝した。それは昭和4年秋以来、10シーズン振りの優勝であつた。

リーグ戦が終わると、この時の主力であつた専門部チームが、関西、中国、九州方面へ遠征することになった。(当時は、早稲田全体の野球部の一部として、専門部、学院に野球部があつたが、リーグ戦には学部、専門部、学院が一体となって参加した。)



森監督と外岡部長(昭和32年11月)

ところが どうした風の吹き回しか、当時 法律科の教務主任をしていた外岡が、このチームを引率することとなった。 その間の事情はわからず、当人には全く寝耳に水のことであつた。

しかしこれが機縁となつて、その後40数年に亘つて学生野球と関係をもつこととなつたのであるから、まわり合わせというものは、全く不思議なものである。

この遠征は、11月15日から28日までの僅か2週間足らずのものであつたが、それまでは、垣間見ることもなかつた選手達の「全生活」に触れて、その中から受けた数々の感銘は、外岡の人生観に大きなインパクトを与えた。

選手たちは 遠征中 絶えず健康に留意し、食事・睡眠を疎かにせず、最良のコンディションで試合に臨むために、あらゆる誘惑を断つて摂生している。スタンドからでは窺い知れない、その真面目に精進する様を目の当たりにして、若人が一つの業に精魂を打ち込む、その真剣さに心を打たれた。

そして、大阪から更に別府へ向かう船中の読書室で、たまたま 見つけた、飛田さんの「熱球三十年」を手にしてページをめくっていくうちに引き込まれ、遂に別府に着くまでに完読してしまつた。

そこには、今まで想像だにしなかつた勝負の面白さ以上のものが書かれていたからだ。

『野球のコーチというものは、寺子屋の師匠の様なものだ。教える事に秩序はないが、グラウンドというものは学校教室の様に冷たいものではない。尻も叩けば、熱罵も浴びせるけれども、寺子屋の師匠の如く、最も師弟が近接して立っている。遥かな教壇に仰ぎ見る博士先生の講義を聴く類とは違う。呼吸も合い通ずれば、手も触れ合う。そこに自然の情愛が湧くし、物質的利害関係がないために、怒罵叱責されても、練習がすめば相互に忘れてしまい、不快さが残らない。』

だから学校教師と生徒の関係の如く、免状が縁の切れ目とはならない。何時までも親友たる関係が続けられる。』 この一節は特に外岡の心に焼きついた。

この遠征旅行を懐古し、次の様に記してる。

「若人が一つの業に精魂を打ち込むその真剣さに、私は思わず随喜の涙をこぼすといった場面も 幾たびかあつたのである。安部磯雄先生によって育まれて来た野球部の、こうした生活は、私にとっては軍事教練の野営では味わうことの出来ない、大きな魅力となつたのである。 些か大袈裟なものの言い方をすれば、私の教育観なり、人生観なり、社会観なりが、これを契機として大きく転換することになつたとも云える」。

そして、当時の日記帳の表紙には、この遠征の途次、大宰府郊外の水城の観世音寺で聞いた 弘法大師の、『空往満帰』(空しく往きて満ちて帰る)と云う文言が大きく書かれている。

【註】

安部磯雄:1865(慶応元年)-1949 明治17年 同志社卒
明治30年 ハートフォード神学校卒 明治32年 東京専門学講師
明治35年 早稲田大学教授 明治34年 初代野球部長
大正15年 社会民衆党党首 昭和5年 東京六大学野球連盟会長
昭和22年 日本学生野球協会 初代会長 早稲田野球の父
昭和34年 野球殿堂入り

⑧ 戦時下の学生野球(最後のリーグ戦)

外岡は この遠征後、専門部の野球部部長となり、さらに7年後の昭和17年に、全学の野球部長に就任した。太平洋戦争が勃発して4ヶ月後のことである。そして銃後の戦時体制が次第に強化されてくると、六大学野球リーグも、様々な形で戦いのうねりに巻き込まれていった。

昭和17年春のリーグ戦は、4月18日に開かれる筈であったが、入場式の1時間ほど前に、京浜地区は米軍ドゥ・リットル隊によって、初の空襲を受けた。そのため、リーグ戦は1週間遅れたが、4月25日から6月21日までに10試合を無事に終わり、明大が優勝、早稲田は3位であった。

そして秋のリーグ戦の時は、戦局の拡大に伴って卒業が半年繰り上がって9月となったため、早稲田の野球部では、9名がリーグ戦前にグラントを去って行き、レギュラーで残ったのは2名だけであった。

試合は、各校が総当りで一本勝負を5試合行い、日程は3週間で優勝を決めると云うもので、朝9時半から始め、1日3試合を消化せねばならぬと云う状態であった。

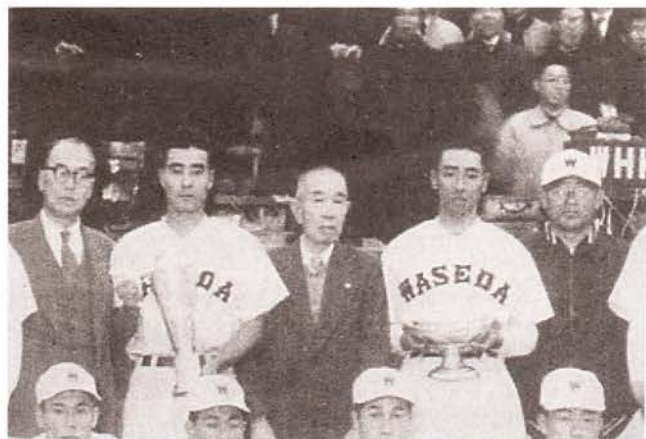
それでも 各校手持ち駒で熱戦を繰り広げ、最終の早立戦を待たねば 覇権の行方も分らないほどであった。

早稲田は明治に敗れ、法政と引き分け、東大には勝ったが、下馬評通り5位という苦しい立ち上がりだった。

慶応は、明治と法政を破ったものの、早稲田と立教に敗れ、さらに東大にも敗れるという混戦状態であった。そのなかで立教は、明治にこそ敗れはしたものの、慶法東を撃破し、3勝1敗の好成績で、2勝1敗1分の早稲田との間で決勝戦を迎えることになった。

それは優勝決定戦にまことに相応しい内容であった。早稲田が二回に3点を先取すれば、立教は四回 3点を返して同点とした。早稲田は気分的に追い込まれた感じとなったが、五回 円陣を組んで氣勢を上げた。そしてその効果は六回に出た。安打の吉村を2塁において8番 桶川が右前にタイムリーして勝ち越し、さらに9番 町谷の右中間を破る二塁打で、ダメ押しの3点を奪って優勝を成し遂げた。

選手達は、技量の足らない処を気力で補って熱戦を展開し、戦中最後のリーグ戦を有終の美で飾ることが出来た。(つづく)



昭和30年秋季六大学野球リーグ戦優勝当時
外岡部長 松岡副主将 飛田顧問 遠藤主将 森監督

リレー随筆

ハーモニーに魅せられて

昭和38年 理工 岡田 鍾 吾

早稲田を卒業して41年、ずっと続けている趣味のひとつがコーラスである。昨年秋もめぐろパーシモンホールのステージで歌う快感を味わった。コーラスの魅力に取り付かれたきっかけは、1959年に入学してすぐ早稲田大学混声合唱団[略して早混(そうこん)]に入団したことである。入学式でのグリークラブの校歌は確かにすごい迫力であった。しかし、何か近寄りがたさを感じ、優しいお姉さま方が勧誘する早混の方に入団した。今では早混稲門会も組織され、「久遠のハーモニー」という50年史を刊行するほどの大きな合唱団になっているが、当時は創設して10年ぐらゐの明るく元気な合唱団であった。1年生の時の定期演奏会でフォーレの「レクイエム(鎮魂歌)」のステージにのせてもらい、美しいハーモニーに完全にはまってしまった。翌60年の前半は安保反対運動で国会へデモ行進することが多く、練習に出る団員も少なかった。それでも安保自動成立の6月18日には、国会へ行く学生たちで騒然となった状況下で、遠来の同志社学生混声合唱団との交歓演奏会が大隈講堂で開かれた。演奏会終了後に国会へ行った団員もいたようで、何とも早稲田らしい光景であった。当時は春休みに主に西日本の各地へ演奏旅行に行くのが恒例になっていた。学校の体育館などで演奏し孤児園も訪問して歌った。演奏旅行は各地の稲門会の支援があってこそ実現したのであり、卒業生と学生が時空を超えて「心のふるさと早稲田」でつながっているのを感じた。

最後に、忘れることができないのが早稲田大学創立80周年記念のベートーヴェン「第九」である。この時の指揮者が新進気鋭の27歳、小沢征爾だった。出来の悪い練習に苛立ち譜面台を叩いた指揮棒が折れたこともあった。音楽に対する激しさと厳しさを知らされた。早稲田の学生というアマチュアのオケとコーラスでも立派に「第九」を演奏できたことを小沢氏は喜び、誇りに思っていたと言う。氏にとって初めての「第九」であり、翌月に予定されていたN響の「第九」が楽員との確執で中止になり間もなくN響を去ったことから、早稲田の「第九」は氏にとって意味あるものであったに違いない。私は卒業後も人間の声で作る純正なハーモニーを頑固に追求してコーラスを続けている。その心は早稲田で小沢征爾氏に教えられたものかもしれない。

次は、渡邊三郎副会長にバトンをお渡しいたします。

第三土曜日は、飲み食い放題の「三土会」へ。

目黒稲門会員誰もが参加でき、気軽に飲み語り合う「三土会」。毎月第三土曜午後6時より9時まで、目黒通り「鮎八」2階座敷を予約してあります。5,000円で飲み&食い放題。

公式の打ち合わせでは出ない楽しい話題もポンポン飛び出します。飛び入り大歓迎! プラッとお参加ください。

★連絡先:副幹事長・土川俊雄 Tel:03-3794-0396

鮎八 目黒区中町1-25-20 Tel:03-3719-2666

(目黒駅より東急バス目黒消防署下車2分)

11:30~13:30 17:00~22:00(日曜休)

囲碁部会

開催予定日 3月20日(土) 下目黒住区センター第一会議室(3F)
4月17日(土) PM1:00~5:00
5月15日(土) 会費 500円

囲碁部会初めての新年会を下目黒住区センターすぐそばの日本料理「松喜」で開催しました。

小雪まじりの天候でしたが、14名参加されました。顔ぶれは、樋口定広、渡辺三郎、郡山弘文、荒瀬修一郎、真仁田勉、伊藤源喜、八幡和三郎、桑野祐光、岡田鐘吾、高橋栄一、志水一夫(北)、古川欽一(品川)、杉山泰大(品川)、保井正でした。それに囲碁だけでしたが、中島勝也元教授も駆けつけてくれました。とにかく面白くて、役に立って、和む楽しい会合でした。

いつもながらに元気な目黒稲門会会員に、今年もよろしく。

囲碁部会長 真仁田 勉

ゴルフ部会

ゴルフシーズンが間もなく開幕します。今年のゴルフ会は下記の通り予定しています。会員、ご家族の皆様の参加をお待ちしております。

月日: 5月25日(火)

場所: プレステージカントリークラブ *10月下旬は未定

なお11月中旬には大学主催の総長杯コンペが開催予定です。

ゴルフ部会長 鈴木 正 明

麻雀部会

目黒稲門会主催による今年度最初の第18回麻雀大会は、3月7日(日)西小山クラブにおいて16名が参加して行われます。

今回新たに榎本茂、大杉邦雄の両君が参加することになりました。今から歓迎するとともに、大いに楽しんでください。

また、渋谷、世田谷、目黒区連合親睦麻雀大会は、今回は渋谷区が当番で、4月中の開催を計画しております。詳細は決定次第、別途会員各位にお知らせします。

麻雀部会長 土方 正 巳

ダンス部

いま、ダンス部は暑いです。一曲踊ると汗です。

こんな楽しい趣味を皆さんに是非知って欲しいです。

『リズムに乗って歩いて、歩いて、ほーら 身体が浮いてきた、リズムに乗ってきた』

何となく感じが解ってきましたか、もう少しです。

後はダンス部に参加するだけです、待ってます。

●日時:毎週木曜日 6:30pm~9:00pm

●会費:男性 2,000エン

女性 1,500エン 軽くビールなども用意してあります。

●会場:東急学芸大学駅2分「サンステップ」

●幹事:小川裕正 3793-5555 090-8002-05557

ogawa555@bg.mbn.or.jp

ダンス部会長・小 川 裕 正

カラオケ部会

H.16.2.14

第26回新年カラオケ部会は、多数参加され盛会裡に終了出来ました。ありがとうございました。

第27回は15年度事業の終了となります。新年以上の盛会を迎えたいと思います。奮ってご参加下さい。

記

日時 3月14日(第2日曜日)午後2時30分~5時30分

場所 スタジオ「サンステップ」 Tel・Fax:03-5722-4484

会費 男性 3,000円 女性 1,000円

アンケート[カラオケ催行に関して]

従来 奇数月第2日曜

新年度 毎月第2日曜

いずれか、当日ご返信下さい。

〒153-0051 東京都目黒区上目黒5-19-5

Tel:03-3710-5761

Fax:03-3710-5762

カラオケ部会長 海 口 昭 治

「水泳を楽しむ集い」のご案内

楽しく水と戯れながら、健康増進をしませんか。(ゴルフの飛距離も更に伸びるようです)。

指導は、昭和41年水泳部卒(?)現「稲泳会」幹事で、目黒稲門会副幹事長の土川さんです。初心者から上級者まで、更に腰痛の予防・リハビリにも対応します。

ご家族の方も、どうぞ一緒に。

場所:五本木小学校プール(駒沢通りバス停「区立五中」下車5分)

日時:3月27日(土)4月17日(土)5月15日(土)の3回

集合:am9:00 プール受付付近。9:15分まで待ちます。

(遅れた方は適宜お入りください)。終了11:00

設備:25メートル、6コース、水温30度、更衣室、ロッカー、シャワー

費用:入場料300円(65歳以上150円)

○用意するもの:水着、帽子、水中メガネ、タオル、化粧品類

○問い合わせ先:TEL.3794-0396(土川宅)

(外岡 記)

一誠堂美術館にアール・ヌーヴォーを訪ねる

美術・歴史鑑賞部会 幹事 八幡 和三郎

東横線自由が丘駅近くにある「ISSEIDO MUSEUM Of ART」(一誠堂美術館)は、目黒稲門会員の川辺忠俊さん(昭和31年卒 商学部)がオーナーの美術館です。過日、若者たちで賑やかな街に美術館を訪ね、素晴らしいガラス工芸品のかずかずを鑑賞することができました。

美術館のパンフレットは、次のように自己紹介しています。

一誠堂美術館はランプを中心にアール・ヌーヴォーのガラス工芸品をコレクションした美術館です。

19世紀末に華々しく開花したアール・ヌーヴォーのガラスは 光と色彩が織りなす夢幻の小宇宙を創りあげ 今もなお私達を魅了してやみません。

ファッション感覚の中にも文化の香りのする街 自由が丘に誕生した小さなサロンは ゆとりと豊かさを感じさせてくれるでしょう。



アール・ヌーヴォーはフランス語で(新しい芸術)を意味し、19世紀末から20世紀初頭にかけて、ヨーロッパとアメリカに広がった装飾芸術および建築の様式です。

一誠堂美術館はガレやドームなどのガラス工芸品をコレクションし、館内はアルフォンス・ミュシャの絵で飾られ、つる草で装飾するなど、全てがアール・ヌーヴォーで統一されています。オーナー川辺忠俊さんの感性が凝縮し、素晴らしい空間になっているのです。

川辺さんには、機会をみて美術・歴史鑑賞部会の行事として訪問させて頂き、オーナーとしてのレクチャーもお願いしてあります。実現のときには、改めてご案内申し上げますので、皆様ご期待ください。